

独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第10回
議事要旨

1. 日時 平成15年7月18日(金) 14:00~16:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 甲斐委員長, 中西副委員長, 相澤委員, 阿辻委員, 倉島委員, 古賀委員,
奥水委員, 柴田委員, 陣内委員, 田中委員, 松岡委員, 山崎委員
4. 会議の概要
 - (1) 第2回中間発表(8月5日)の確定作業等について
当初検討対象語としていた58語を, 次の理由により52語とした。
イ. 「デジタルアーカイブ」「バーチャルリアリティー」「マネジメントシステム」の3語については, それぞれ「アーカイブ」「バーチャル」「マネジメント」の複合語例として処理することとした。
ロ. 「アプリケーション」「ハードウェア」「ミッション」の3語については, 更に調査・分析を行った上で, 次回提案することとした。
 - (2) 第3回言い換え作業日程等について
イ. 平成15年9月, 10月にそれぞれ30語程度の定着度調査を実施
ロ. 平成16年1月下旬に第3回中間発表
ハ. 平成16年4月下旬に第3回最終発表
5. 会議での主な意見
用例を日本語に置き換えていくときに, 概念として使われているのか, 物として使われているのか, それが統一されていない限り, 言い換え語が二つになることは仕方がないのではないかと。
判断根拠として, 新聞などの用例を元にするのは, 手続きとして正しいか。用例は言葉に対する神様のような理解力を持って使われたバイブルのようなものではないし, しゃれて使われていることもある。言葉は使われれば, 単語として存在しないで文脈の中に存在する。いろいろな要素がその中にあるので, 用例をもとにして根源的な訳をつくらうとするのは手続きとして理解しにくい。
委員会は, 用例を参考にしながら, 且つ, 本来的に言葉がどういう意味を持っているのか明らかにして, 提案していく役割も持っているであろう。
ここでは, 日本語になったか, なりかけている言葉を考えているので, 外国語を考えているのではない。
言い換え語というのは帰納と演繹の両面がある。たとえば「エンパワーメント」という語を, 日本語に演繹していくのであれば, 本来の語義から考えれば「強化」となるべきだろうし, 現実問題としてたくさんの用例がある。それを日本語に帰納していくときに, 現実の使い方としては「能力の開化」の方が現実に相応しいという状況と判断されるのであれば, 帰納的に「能力の開化」としかできない。つまり, 目の前にある用例から帰納していくと, この言葉が最善となれば, 言語からの演繹と外れても仕方がないのではないかと。
概念と物とはっきり分かれて二つというものに限らず, 議論があるのであれば, 一つに絞らない方がいいし, また, 用例についても一つに絞らずに出す方が今の外来語の状況を表していて, いいと思う。
これまでも形容詞的な言葉が取り上げられ, すべて「な」を付けずに名詞形のかたちの言い換え語が提示され, 用例や手引きで形容動詞的な用法のあることが示されている。しかし, これがおかしな日本語を生み出しはしないか。
形容詞は, すべて「的」にするのも一つの方法ではないか。

適切な語を考えようとする場合、漢語は非常に便利なものであり、漢語をやや偏重してしまう恐れがある。一対一のコンピュータ的な置き換えをするのでなければ、使用者側にも考えていただく部分を残しておくのも一つの方法と思う。

以上